

都繪馬鑑貳

洋学文庫
文庫8
D256
2



文庫
D 256
2

都繪馬鑑二之卷目錄

目錄

田村磨退治夷賊圖

清水寺

海北友雪齋画
。堅二間横六間

行叡居士於靈木附屬延鎮圖

清水寺

筆者不知
。堅一間横二尺半

頼政射怪鳥圖

清水寺

海北忠左衛門画
。堅一間横一間半

附源三任頼政像
。鶴之圖

七福神戲遊之圖

清水寺

筆者不知
。堅一尺横五間

更澄齋
花書印

諸侯行烈之圖

清水寺

辻村氏兵衛画

朝比奈素草摺曳之圖

清水寺

。堂五尺横八間半
長谷川久徳画

鐘加之圖

祇園

。長谷川宇右衛門画
。堂一間横四尺

都繪馬鑑二之卷



○田村曆退治夷賊之圖

清水寺本堂外陣正面向北向よ掲

明曆三年海北友雪齋の画。横六間堂三間の大繪馬。筆力凡そ此世に扁額の軌範と称せり。友雪と海北友松の子菫暉斎と号す。

坂上田村曆々後三位兵部卿右京左大臣贈大納言蒔田丸の二男。

。天正元年。正三位。叙。中納言に任じ。同年九月。大納言兼右大臣。任。軀長五尺八寸。胸の厚一尺二寸。向て見ると。偃如し。背て見ると。俯如し。眼と蒼鷹。眸如し。鬚と黄金の線。髪如し。如

重くとも。時々二百一十。時々六十四。行動。操に應じ。輕重。心。に任。と。怒。且。バ。極。歎。も。忽。ら。慟。道。嗟。を。推。子。も。懐。く。面。を。桃。花。の。毛。春。さ。る。尺。で。常。に。紅。を。り。到。節。性。派。持。入。松。毛。を。送。て。獨。翠。を。り。武。術。を。世。に。稱。

速水春曉齋輯

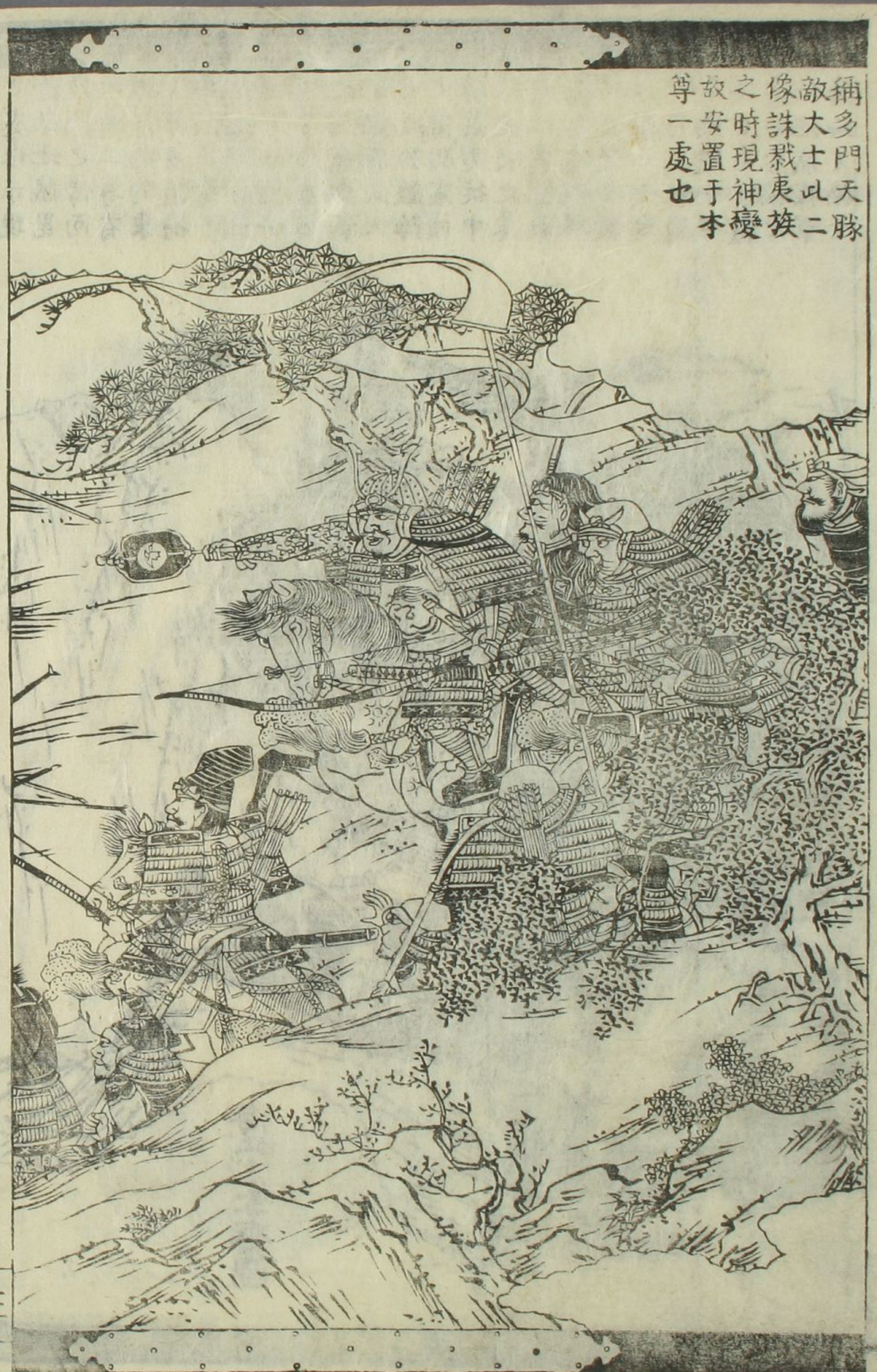


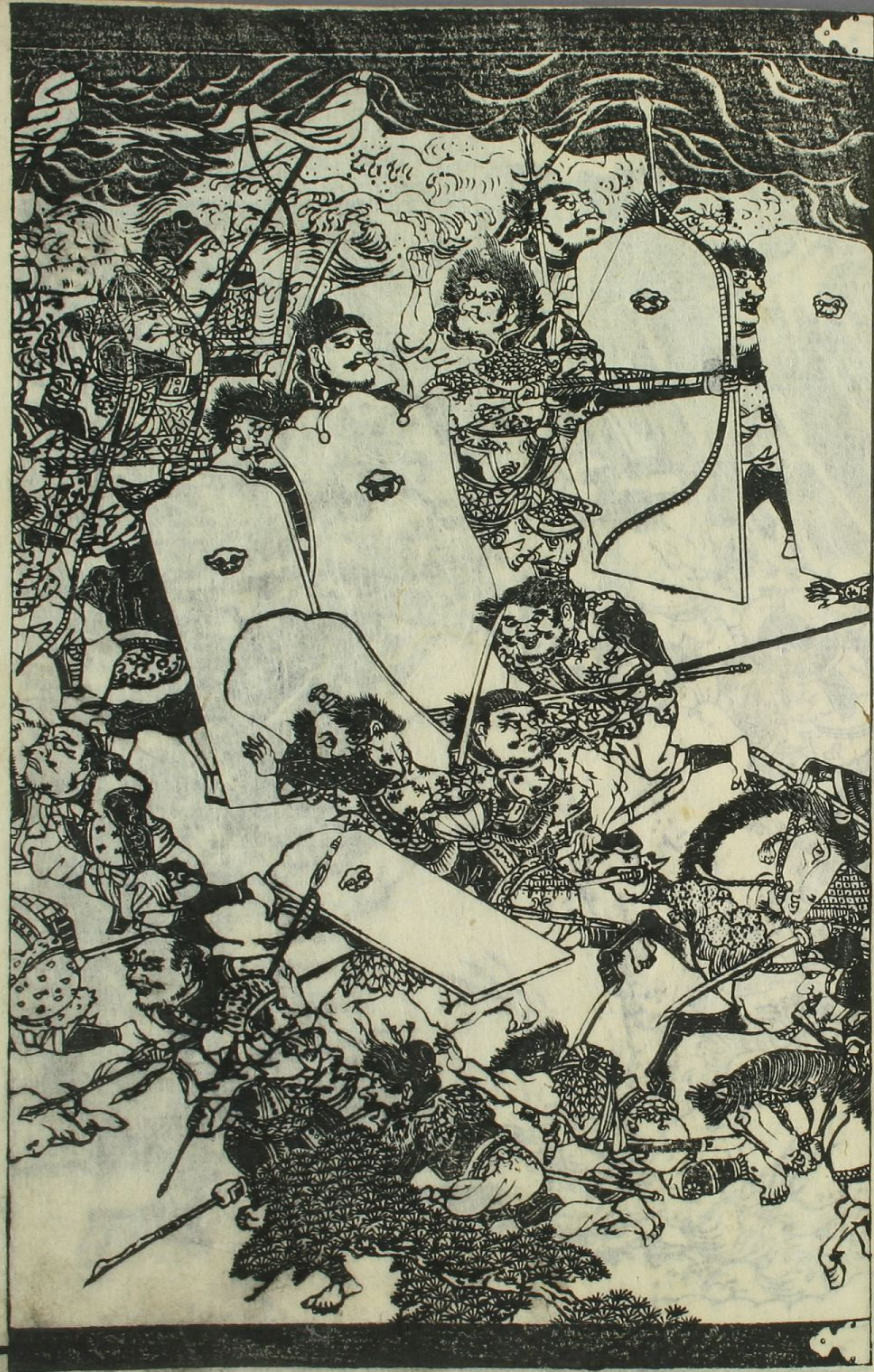
て勇威人小踊(文)以(字)張良武(書)蕭何(仁)智(事)と云く
傳(人)皇(五)十(代)桓(武)大(皇)延(曆)七(年)奥(州)の(兵)賊(皆)紀(郡)より(紀)小(佐)
美(安)倍(墨)繩(以)して(征)移(る)も(夷)賊(強)して(官)軍(利)を(失)ふて(敗)走(る)夷
賊(弥)勢(強)大(う)て(官)府(と)を(侮)る。十(年)征(夷)大(使)小(佐)大(伴)守(磨)副
使(小)百(濟)王(俊)哲(坂)上(田)村(磨)兵(を)率(ひ)て(陸)奥(國)多(賀)の(國)府(官)城(郡)
聖(武)大(皇)神(龜)元(年)國(府)外(小)佐(守)府(と)並(大)佐(東)人(と)して(東)山
東(海)部(を)使(守)法(守)府(將)軍(と)して(下)移(る)陸(奥)國(を)圍(度)く(皇)主
都(に)遠(り)て(夷)賊(の)強(を)く(り)たり(と)思(は)ふ。時(東)人(法)守(府)の(門)より(碑)
を(建)らる。此(碑)何(の)に(より)う(中)に(埋)め(る)人(を)一(道)年(法)守(府)城(の)跡(と)
今(後)法(守)府(小)佐(守)府(の)跡(を)謂(ふ)る。小(佐)守(陣)を(屢)合(戦)く(逆)小(佐)賊(徒)を
平(け)降(洛)あり。就(中)田(村)磨(の)武(功)被(群)けり(る)が(勸)賞(殊)を(受)けり(ぬ。
十(四)年(東)奥(の)殘(賊)高(磨)并(惡)路(王)の(二)人(起)て(達)谷(を)窟(に)立(番)り
邊(境)以(侵)し(猛)威(を)震(ふ)先(賊)倍(と)小(佐)勢(以)張(る)勝(小)勢(が)河(を)以(て)
責(上)ふ(る)國(と)り(の)奏(類)あり。法(書)小(佐)延(曆)二(十)年(磨)惡(路)王(達)
谷(を)窟(より)起(り)殺(河)國(法)守(府)窟(を)以(て)

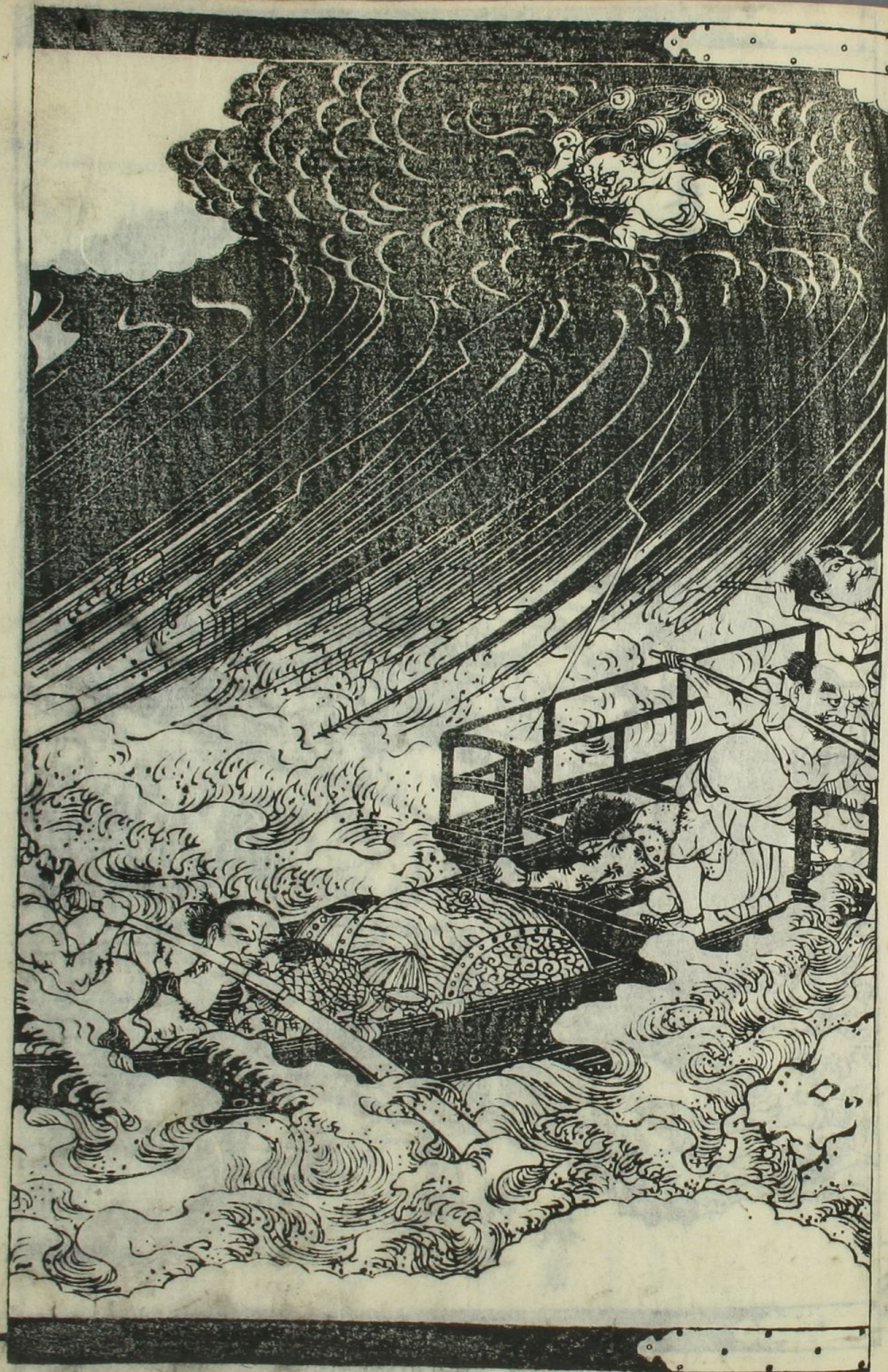
責(上)ふ(る)國(と)り(の)奏(類)あり。法(書)小(佐)延(曆)二(十)年(磨)惡(路)王(達)
谷(を)窟(より)起(り)殺(河)國(法)守(府)窟(を)以(て)
田(村)磨(を)征(夷)大(將)軍(に)任(じ)節(刀)以(賜)り(て)凶(徒)追(治)の(宣)旨(あり。田
村(磨)勅(以)たり。自(頃)清(水)寺(の)觀(世)音(を)深(く)信(じ)り(る)當(寺)に(詣)り
然(敵)悉(退)散(以)り(念)以(延)鎮(和)尚(為)小(佐)勝(軍)地(を)菩(薩)勝(敵)昆(汝)門
天(の)兩(像)を(造)り。征(敵)勝(軍)の(法)以(被)り。田(村)磨(を)官(軍)と(率)ひ(て)勢
州(を)發(向)と(夷)賊(勇)以(震)し(官)軍(河)防(ぐ)夏(統)の(雲)中(を)ま(り)虎(の)怪
風(以)起(る)如(り。時(に)陣(中)より。一(僧)一(男)現(る)。僧(を)敵(の)矢(を)防(ぎ)男(子
は(寶)箭(を)放(ち)移(る)車(兩)乃(降)ぐ(如)く。夷(賊)の(勢)忽(ち)墮(て)乱(れ)強(ぐ
み。ま(り)大(風)起(る)敵(を)吹(倒)す。大(雷)頻(に)震(る)賊(中)小(墮)落(る)田(村
磨(益)勇(敵)以(移)る)如(く)碑(を)打(つ)る。夷(賊)性(風)小(和)を(覆)す。官(軍)に(逆)と
七(裂)八(裁)小(敗)る。奥(州)小(引)退(く。田(村)磨(賊)を(逐)く(奥)より(賊)首(高
磨(以)射(斃)す。惡(路)王(を)生(捕)て(誅)戮(す。大(に)凱(歌)を(唱)く(降(洛)あり。



稱多門天
敵大士此二
像誅戮夷族
之時現神變
故安置于本
尊一處也







明曆參季

仲冬廿八日



信心
施主
敬白



田村磨夷賊退治の因に海内諸馬の壯觀たること
又他ふ級のごとく大なる諸事とて其友聖とて
かゝる事ありやとて高きことつとてその力も
うまふ事ありとて其を其の真の力なりと
とる事ありと云

春成

観音の加護延経和尚が修験によれよ。奏聞有るに帝斜あるは
おがく。田村磨に勸賞はぬ。延経を内供奉に補し。北観
音寺の勅額河賜ひ。寺中境内の四至傍るは定免官符と賜ふ。十
七年七月二日田村磨先季の大願によれ。佛殿と造替し。云々
昆沙門天地を善菩薩の
両像今幸その振立よ安ん

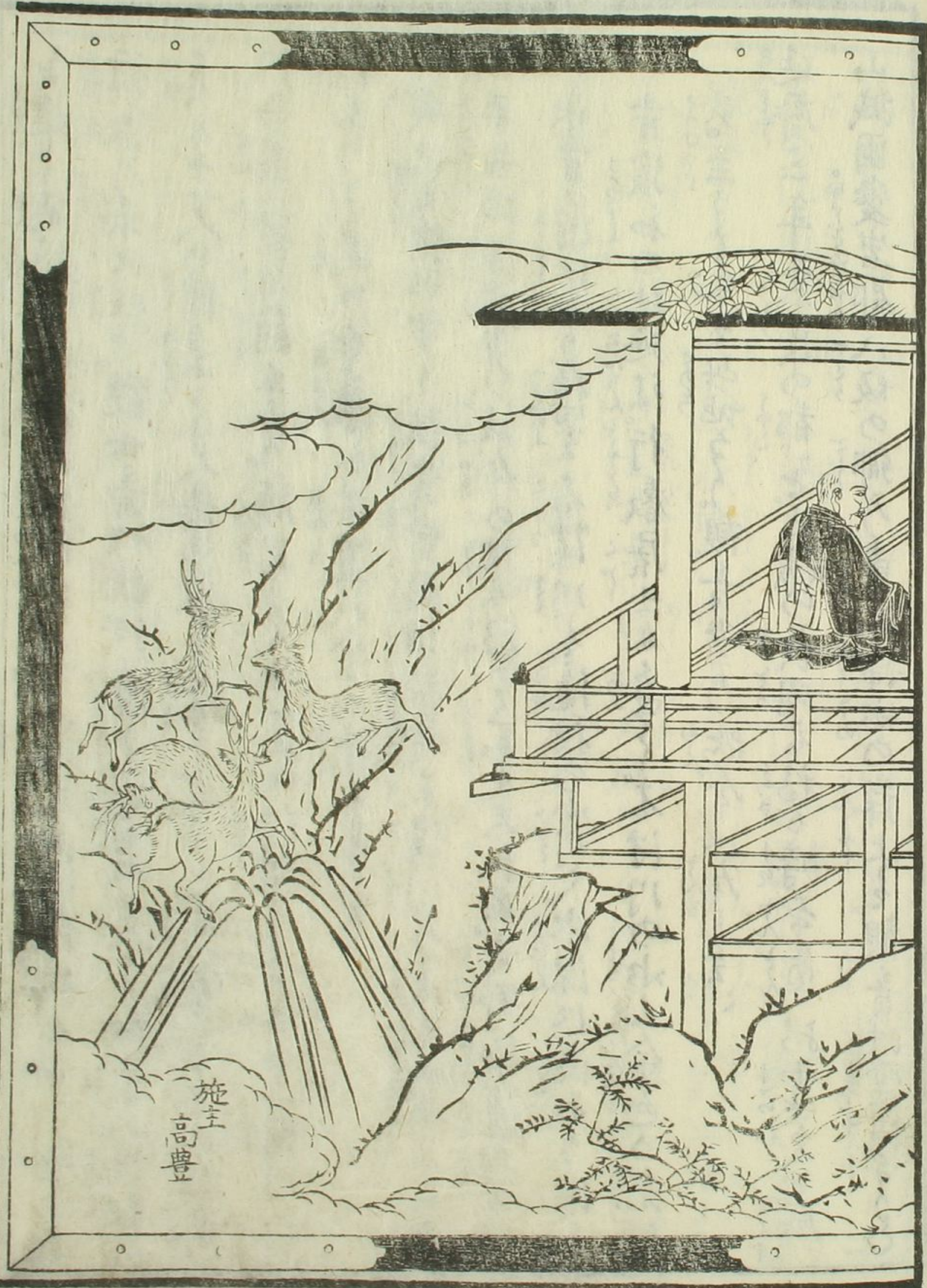
○行叡居士於靈本附屬延鎮圖

清水寺奥院に據く

年号不詳 堅壹間横二間半

傳云大和國高市郡小島寺に延鎮せし僧あり。常に觀世音と
信し咒を持し苦行練行と云ふ事あり。或夜化人夢み告く云く汝
觀音を信じしに深し本津川の川上に觀自在の靈地あり。行く住べ
しを覺く後告み任く。本津川を渉る。一乃支流に金色の流あり。
此水源及び到と。一の滝あり。傍み卍庵を結び白衣と着せ。老
翁住せり。延鎮翁の跡み至る。何人をも問ふ。老翁曰く。我名行叡。
常み千手の真言を誦して此地に住し。二百餘歳我汝を待て。老
久し。善哉事とる。夏傍の古本に指て云。是靈樹なり。人悲の像と造ん
事。汝思ふ貴僧は地に住し練若く建庵し。我を東國に度の願あり。

やて東方より去りぬ。延鎮此地に住す。一日東方山城國山科の郷
音羽山に至るに居士の履あり。云羽を是大慈の應化なり。我を
今山城山科の牛尾山法藏寺の地なり。本寺千手觀音。大智文を
作す。振檀より叡居士。延鎮法師乃像あり。後山科を音羽と云。音
羽の滝あり。世は清水寺の奥院と稱し。古へ伽藍觀音の舊地を
今乃山と云。五町あり。中ごろ大は喜よ。今乃世の再建なり。
延鎮廢代取す。卍庵に住す。任事五年。桓武帝。延曆二年坂上
田村磨鹿を狩り此地に至る。人跡絶境の地に草庵を造り。内
涌經の声あり。田村磨鹿と云。内は麻衣の座に僧あり。云此も神
仙の如し。田村磨鹿問て曰。僧は何の行代修して。人跡絶る地に住
するや。法言て云。我觀世音代念ぶ。始に居士が文を法系。田村
磨鹿仰ると。事深し。田村磨鹿が室尊子。常み疾あり。延鎮に乞
符を授り。南都より帰る。妻室も治りて符あり。觀世音乃名号
を唱へむ。病忽に愈たり。夫婦觀音の法驗深し。信し觀音を



施主
高豊



偏頗のよ
行敷居士
延徳の
書
細密
以
畧之

を鹿同様にとらり

此國運法本津川の川上水攀々行敵居士と對面乃侍を因せり。滝の傍に鹿を画す鹿冢の因取て画所也

○頼政射怪鳥圖

清水寺本堂外陣に掲ぐ横一向才壁一写

寛永十二年 海北忠左衛門画

傳云七十六代近衛院仁平の頃夜に魔嚇ふせ給ふ御案乃功も夢
に有驗の貴僧大法秘法法修せられも更に給ふ。秋く東之條の
處より黒雲一村を来り御殿の上より覆へ必に雲の魂消らせ給ふ
公卿會議有て源平兩家の中より兵庫頭頼政法撰せられ鳴弦仕
し命ぞ頼政勅宣おとらる應に二重の狩衣を山鳥の尾わく
矯むる傳々二筋流るる弓に添く大床も何候に郎等にも猪早を高
直も母衣の風切結るる矢負せ唯一人を具たり
源平盛衰記下丁七
唱猪早を二人を具たり

案の如く御殿の刻限に及んぐ東之條の森此方より黒雲一村を来
て御殿の上より覆ふと見え給ふ玉絆を驚し奉心頼政吹と見
上られ雲の中より容あり應に矢取番に雄山八幡宮に經
ぬ行念し傳と射る過ぐに搥搦し雲強に鶴聲鳴響て御殿乃
上より庭上に墮と墮猪早を走寄り取て押へ柄も拳も透すと九
刀までぞ刺り。堂上堂下の人。松明照りて見し六頭を猿尾を
蛇も足も虎鳴声も鶴も似く滅ん怖る怪物あり。御殿の餘り獅子
王の御劍年が作を賜ふお節郭公青佐られは宇治大匠頼長卿
郭公も名も雲井もあつと水と伝はれ頼政月とお後月あけて
弓張月此射ふまをてと伝る怪物は清水の岡に埋らうと云
又二條院の時鶴慶鳴く宸襟を愠しな先例も伝る頼政射之
此度と御衣は賜ふやと五月雪名とあはせ給ふ今も青も伝はれ

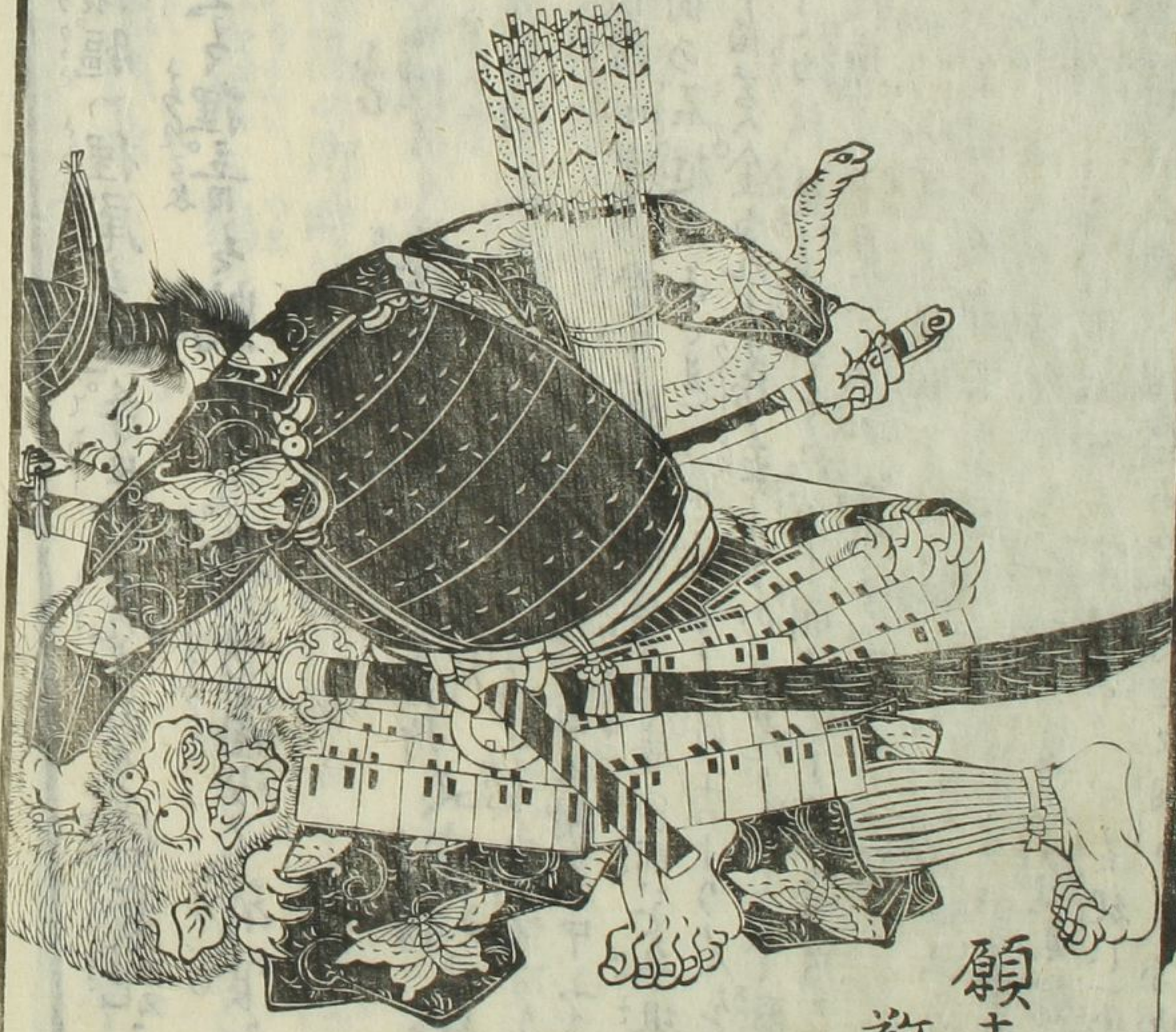
寬永十二乙亥年六月吉日



宿坊成就院

海北中九衛門筆

奉掛御寶前



願主敬白

備くや召見たり。左衛門佐清成無き事。南殿に羽紋あり。搦りて作
 と。清盛は終自在小天を翔んどのいで取べきと必ひ。其声
 應じ。此鳥強く左衛門佐がたりの袖の内へ飛入。則取て執る
 何鳥と云ふ。又をまう。後よりく。これい。ま。あ。う。こ。毛。あ。り。の。港
 名。これ。を。南。基。乃。竹。の。中。小。こ。多。く。清。水。寺。の。岡。小。埋。こ。毛。あ。り。の。港
 一竹が搦く云々。今其所五尺あり。一竹の搦り。又。其。政
 が射たり。怪鳥と清水の石。埋と有。怪鳥。石。搦。小。網。て。埋。く
 石。搦。り。せ。り。人。云。あり。

按る小頼政鶴を射候事。人々繪多に然れども日並乃実記に不
 載日並乃の怪鳥をも紀するに箇程乃殆ど不記に不著し

台記 宇治左府 日康治三年五月二十六日丙子今日午射東三條乾角
 の杜樗無風折本に徑四尺九寸。去地四尺計折前日夕杜内有牧人語
 声自良角杜木如烟气入雲中未刻京師雷電暴雨一所有
 破人屋此毘出自東三條杜内

又日六月十八日戌戌丑卦針圓鶴聲召恭親令古鶴事

又日二十四日甲辰鶴妻女房所勞重
 是等以雜々作ふ不れ

和漢三才圖會
虫之所の鶴之圖



此鳥春の末より夏まで
 夜ちくとり
 洛東清水寺より西山天
 へ。地。を。八。夜。々。ま。ま。の。あ。い
 怪鳥。あ。い。ん。ん
 山海經。單。張。山。の。鳥。あり。形
 雉。の。く。文。あり。白。鶴。云

康治と近衛院の年号也。按るに是等以雑々作ふ不れ
 〇鶴 倭名抄云。唐韻云。鶴海篇云。鶴鳥名也。漢法抄云。沼江怪鳥也
 或云。鶴此鳥晝伏夜出故名鶴
 和漢三才圖會云。按るに。今世鶴と稱する者怪鳥にあり。洛東及
 如。深。山。小。多。く。り。り。大。き。き。好。り。く。黄。赤。色。黒。處。鳩。小。似。り。晝。伏。し。
 夜。出。く。木。の。杪。へ。喚。く。其。音。乃。上。里。下。黄。々。り。鳥。の。後。の。窸。々。れ。は。應。に
 声。休。戯。と。云。如。く。脚。美。赤。々。り。

盛長私記と皆首と降るる事

三任八道の首をかの面かめり

遍給り。東温月之

長門平字守水物倍ま官と好ま

原之任八道以下五十餘人首を上げ

軍兵都本波の親父入の頸を

持りて首をさし首をさ

親政の首をさす事

親政の首をさす事

親政の首をさす事

親政の首をさす事

親政の首をさす事

或一林利可威
源三位頼政像



扁額軌軒二篇上卷下二

頼政を攝津守源頼光五代の孫冬河守頼綱が孫兵庫頭仲正が

子也白河院乃判官代保延二年藏人補せられ後五位下に叙し。

久壽二年兵庫頭も任じ。五位より四位も任じ。右京左大臣任じ。

内の昇殿と陸まじ。治承二年後之位も叙し。上りて後醍醐天皇の平

叙せり。二年出家し頼圓と号し。後真蓮と改め保元の合戦

も御方や。先登り。平治の乱も。親屬を捨てる事たじや。も。させ

賞も。も。し。日四年高倉宮。後白河院。二に御謀叛を勸め。事よく

露して。平治の平等院や。自叙し。年七十五

盛衰記を頼政が首以下同部を即取。平治の乱の後。戸北板敷の

下の屋を。頼政の首を。入る

山槐記云。飛騨守景家。頼政入道頭。上総守忠清。得多。源頼朝。平治

院の御自守の者有三人。其中一人着淨衣。無頭有疑。頼政。男伊豆守仲延

孔主不詳。又宮入南都。新院密。幸入道大相國。御覽。頼政。平首

百練抄云。治承四年五月廿八日。新院密。幸入道大相國。御覽。頼政。平首

神なり。後日に是と申さん。今迄く是河同くむる交なる道と。其後天
下は流く孫の時。天孫も此由河同く推根津之津神云。吾は是
天祖の始り子。蛭子命之神。今まや海の宮と助く。吾世の富
幸氏司。暇守く幸得市小賣の守く。幸氏得田の種もや幸
と得軍の我を守く。幸氏得細の事。守く幸と得。天下の富と
神なり。往て廣田國に住く。今廣田國大津細に在り。
○大黒天。天佛なり。摩利支天の如く。て兵家者流。是氏軍
て軍利と行る。浮屠の是と信じて。供養と乞。民家より。小教て幸
と行る。佛流摩河迦羅。大黒天神。今自在業力。以く之故。安
婆世界より。来り。大黒天神と顯。乃至佛。白く言く。我一切の負。窮
无福の衆生に。ぶく。大福徳。為人。今優。使女。塞れ。形。以。現。乃至爾
時。世尊。白く。因。以。咲。と。合。呪。と。説。曰。曩。曠。と。曩。多。没。駘。喃。噫。摩。訶。

迦耶婆娑訶。爾時大黒天神佛。白て言く。若未法の中。衆生有く
此呪。持る者。我體。若く。五尺。若く。三尺。若く。五寸。其形。像。と。刻。伽藍。に
安置。し。ま。ま。に。内。に。崇。敬。せ。ば。我。七。世。天。女。眷。属。八。万。四。千。人。の。福。徳。糾
等。以。遣。して。十方。に。遊。行。く。每。日。一。人。を。化。せ。ん。若。我。説。下。虛。妄。の
ら。水。く。惡。類。も。隨。て。奉。養。に。還。さん。若。又。種。く。珍。菓。美酒。を。以。て。供。養
する者。は。將。來。甘。露。河。際。ん
○摩訶迦羅唐の。大黒天神と云。大神力あり。壽無量千歳を
○今。渚。寺。の。食。厨。乃。び。庫。門。は。大。黒。天。は。祀。更。の。南。海。宮。可。降。傳。云。西
方。の。法。大。寺。或。く。食。厨。の。柱。の。傍。或。は。庫。門。の。傍。に。在。る。に。是。の。神。を
祀。す。と。表。は。す。或。は。二。三。以。て。一。に。祀。す。と。云。神。王。の。牀。と。云。て。君。を。祀。す。と。云。て。金。銀。玉。石。を
却。り。小。財。を。踏。一。脚。指。を。置。る。毎。に。油。を。以。て。拭。く。黒。色。を。以。て。其。の。神。を
祀。す。と。云。河。神。は。一。神。に。是。の。神。を。祀。す。と。云。古。代。より。相。傳。へ。て。是。の。神。の
都。府。に。在。り。但。食。時。は。多。く。厨。家。毎。日。香。火。を。薦。む。五。香。の。飲。食。は
て。有。る。例。と。す。

大黒傳教大師示現して曰我毎日十人と供養してはく寺院を度
ん大師を我山に千九歳後あり清く水くくも供養せよと又と入
黒澤清乃ら此敵山よと不各入黒社以建く護法神と日蓮上人
三面の人黒の漬文小件の手紙載且云く毎甲子日生黒豆百粒以
もつておまへくは秘之秘也と

○今善通に用ふの大黒の像と入りお圓光印を纏りたのしと
と持たのりお袋と建兩御女未徳以踏り依る日本の物衣以
未教と盛の年畧り其衣被も昔く日本のは俗く曰大黒乃
本經よりに通華以布紐の款入法ん紐を掛は俗に云く
龍と云く使獄と云く甲子の日以用中より云く大黒舞毎よ米
穀と云く宿の穀以をせんや

○一説に高皇產靈天皇の孫孫獲く梓を著草中園の主と云く
律至武甕槌の二作と出雲國五十田狭の小町にあり大己貴
曰日皇孫の孫此地を降くよ汝南に懸くや吾や吾美事
我子事代主神と云く保くはあり使主指宿紐を懸して是
ひ交代主と云く此神此神同なり我父也と云く吾又連くは云く

女子より小産る大己貴杖下の履茅以二指を授く云吾は茅と云く
率に切りて大孫杖束と那いく風以流り後くは年出る
百石足之八十限小産く○大黒大己貴と云く衣と有る
指相回くは年壽に測りあり大己貴一名大圓神大黒大圓神
大圓神の衣を有り御杖と事代主事と代と云く後と云く
高皇產靈子大黒の像以造る古傍板の之取目は後以用中橋の之取目
あり人への贈りあり千万人のを以て云くの謂

○多聞天 梵に毘沙門と號 福德の名四方小園中り以以く多聞と號
たの子臂以伸指を地地柱右の子肘を屈く佛壇を發く金甲を被
て是に女人の肩以踏り云と依以く是と擁 大己貴と云く此方と云く上
法華普門品曰毘沙門の身を以て得度と云く者よ即毘沙門身と
現て為に法以況法華義疏云少方主王と云多聞と云恒小伴道場
を護く常小泥法以因故小多聞と云大論云多聞に多聞と云夜及
及び夜利の主と云索隱云福德の名四方に園中り以以くの故あり

正徳貳年 辰十月十七日

前寶

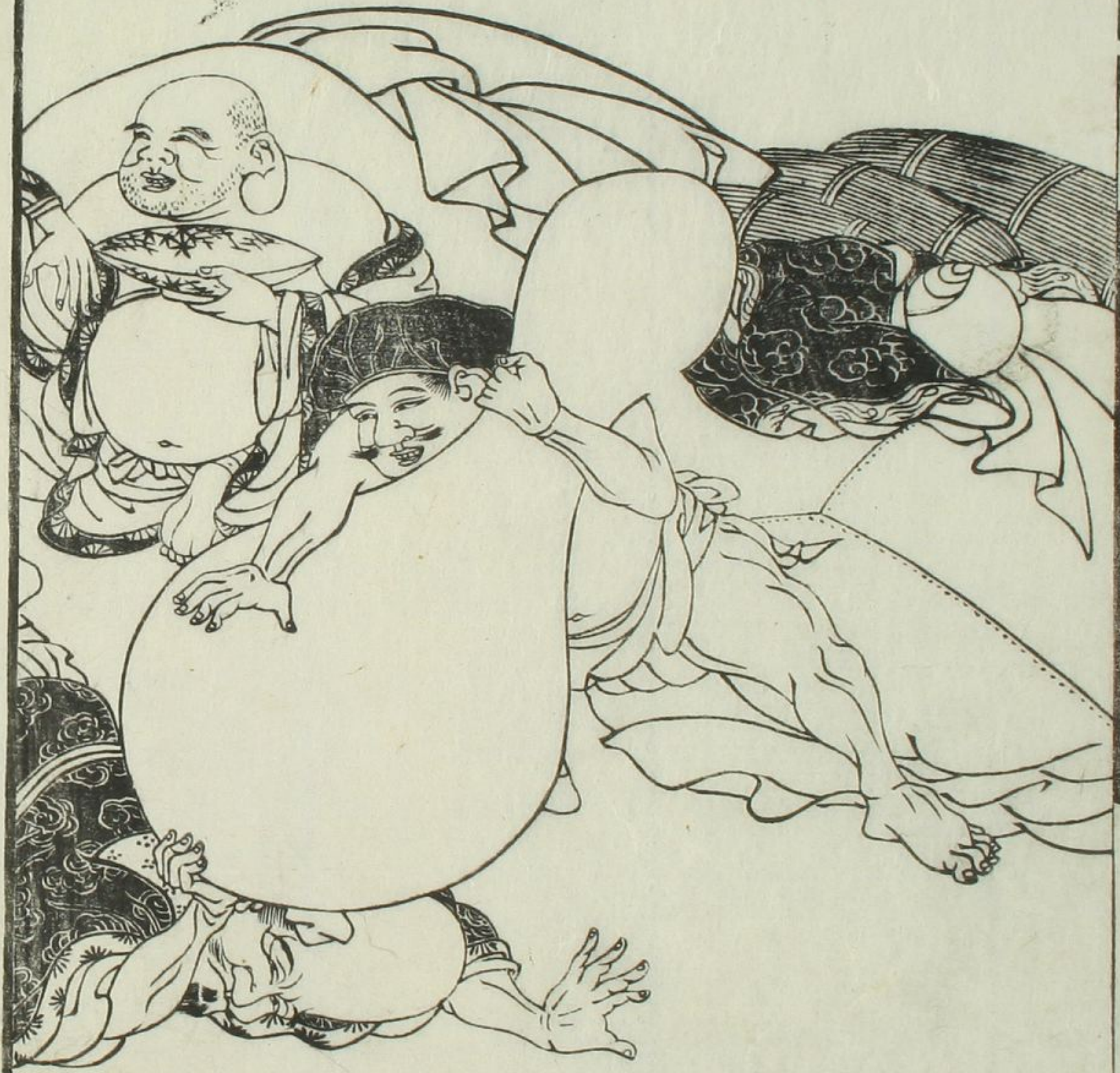


宿坊
成就院

歌之法師

女の頬の
起脹を
を於福
と福を
を福を
を福を
を福を
を福を

御掛奉



圖中
取たる女
あう儀
於福と
えら女
重り目
福の福
うて戲
あ福
於福又
乙卯
福と

又普同と翻り。佛堂に古佛の舍利塔を移し。金光明經云。多聞を種く。聞と名く。水精山に居ると云く。般若所掲羅軌云。七寶金剛地甲。曹氏着いたの手にて戟と執る。右の手に倭と托し。一云。秋及忍利の二。鬼氏踏塔と聲。并と持て。或は金色。或は青色。或は白色云々。

○辯財天 貧乏持て。福德圓滿白蛇示現。三日成就。經云。賀林王。福德圓滿陀羅尼經あり。

辨之經曰。賀神王。形天女乃ふ。頂上小寶冠あり。冠中は白地あり。其地乃面老人の如く眉白し。此則諸佛の出世毎々多身衆生と利益と爲事。羊久瑞相なり。彼如神王と。身白蛇乃。白玉如く。八臂あり。たの牙一は鐔牙。牙二は輪宝。牙三は宝弓。牙四は宝珠。右の牙一は銀牙。牙二は捧。牙三は溢。牙四は箭。頂上如意寶珠。團光あり。後十五乃王子あり。其形童子なり。或時と面々に三摩耶氏持し。

或々如意珠氏持し。神王乃た右小圍繞り云々

- | | | | |
|--------|------|------|------|
| 十五童子玉潤 | 印輪童子 | 官帶童子 | 筆硯童子 |
| 金財童子 | 稻粗童子 | 斗升童子 | 飯器童子 |
| 衣裳童子 | 蠶養童子 | 酒泉童子 | 愛敬童子 |
| 生命童子 | 促者童子 | 牛馬童子 | 紅車童子 |

辨之經曰。今時中。賀神王及び十五童子。各此咒と呪云々。又地及至。及至。初し。又。七珍。萬宝。八雨。と云々。

今。佛。得。如。室。宝。珠。陀。羅。尼。經。云。一。切。衆。生。乃。爲。小。大。良。福。田。と。依。る。福。德。圓。滿。陀。羅。尼。經。云。母。子。東。南。の。角。小。三。神。王。あり。一。の。乳。湯。神。二。の。貪。欲。神。三。の。障。礙。神。と。号。く。是。始。三。本。衆。生。の。所。相。敬。也。此。十。字。乃。法。佛。之。生。情。愍。の。と。先。々。其。の。福。徳。愛。敬。氏。持。た。る。後。も。天。蓋。の。頂。上。の。宝。冠。乃。如。く。其。福。を。致。さ。ん。時。亦。賀。神。王。頂。上。の。白。蛇。と。

老人星と井宿乃分あり天文書云秋分の旦丙午見春分の夕
外及及以孤井宿の内の南極界なり明大なる時之天下安寧
なり然るに其の星此星人民の壽考代主也南極地に入るを
二十六度得見べし故其星其星出以て見る其地と出
又其星遠くは

風俗記云宋の元祐乃宿系に一老人あり長サ二人首えと相才
あり秀月豊登舞幅巾袿服トとぬく日に市は移ふ錢をばらけ
飲む或は其首以叩て曰吾身ハ壽考益以聖人なり一日中宮の
王見と異なりやして其形と固して上は養を肯あつく内殿に
て上同降ふ今幾年ぞ老人の云は南方より来る酒は飲て破て法
言ふ遂に是れ幼て飲む一挙一石往々て云く黄河屢清を
見る上眷方に涯へ俄は其人を逸に但首は清風庭は満白雲

空に映むるの羽星如太子奏し孫小壽星乃躡空よ帝座に
聯る上益々移り異々移り方知見る所の老人ととをりし
つるを採訪と道ども竟に得べし其國以取賛して曰老人
星也老人星一朝醉酒走天庭黄河屢見清於世試回長生
不見形

○福祿壽 今圖する其見たる其長首えと相才する
傳云邾和璞後南に座に人の如く等るれ術をたたり果は
者を活け道は多ぶ者多し一日才子罹曝は滑く云異客未ん
と翌日果く一人至る身は長五尺濶三人首其才にあり継衣勿
を扱く舞は舞く人矣及勿角身は侵して劇は多く人々の
語は解は罹曝は庭とて客熟行く和璞小滑て云く
泰山老師にあつて曰然る食畢て去る和璞曝は滑て云く

上帝り。後に戯て有り泰山老師と云子復往く昔や曙日。向小先生之言と同小其大恭山老師の後身と然ども前身記とことと云
代撲後小の如くはと云く

按に壽老人を因とて附とて老人の形を寫し傍に鹿及龜鶴と画
鹿音保龜鶴と其壽を取ら福祿壽と因とる。其形首元と相
半とる此像と寫し風俗記小載る不其然と首元と相半とる此南極
老人星と云はれ皆小壽老人福祿壽幸一證とる

○或説小七福神の内福祿壽と云て吉祥天あり

○吉祥天々并況又吉祥天女十二名號經曰此大吉祥天女の十二名
號を記す能く受持し流涌修習供養し他乃亦不況は能く一切災
窮業障を除く。大富貴を獲んに財宝以獲ん。不謂吉慶。吉祥達
華嚴飾具財白色大名稱。蓮華眼大光曜施食者於飯者室

光大吉祥。十二名号と云大吉祥陀羅尼云怛囉也他室哩
拈室拈菩薩囉迦哩野娑。駝顛悉顛々々々。阿洛乞史若曩捨野
娑。囉賀。此陀羅尼乃十二名號能く貧窮一切の不祥と除ん有
不の願求皆圓滿以得ん若法之夜時に此經を流涌し毎日之遍し
或々常小受持して聞らば。饒益心以作して力に隨く。虔滅は又吉祥天女
菩薩を供養せば速小一切の財宝豐饒吉祥安樂以獲ん云々
金光明經吉祥天品云法無量百千萬億の流生をて諸乃快事以受
し乃至須知衣被飲食資生具足。金銀瑠璃磚礮碼碼珊瑚琥珀
眞珠等此宝悉く元是しめん云々
諸天傳に大功德天と云ま福祿修して世出世間一切の妨礙以成能ん
欲せぬ天をたつ小如くふ。故小名氏頭して居其不求令得成能大
徳天と云

承應六年

傳云行列
信長公の時不
法度の初め
多し人殺り
室元終つて

○奴隸の天頂の月代
を利は及ひ頼と



も利は及ひ頼と
新勢は常と云ふ
せん其頃の風俗
なり頼は後と云
るは墨坂と云ふ
と云ふは頼と云
は是元禄の比と
云ふは元禄の比
車も多し作らひ
ら奴の思あり

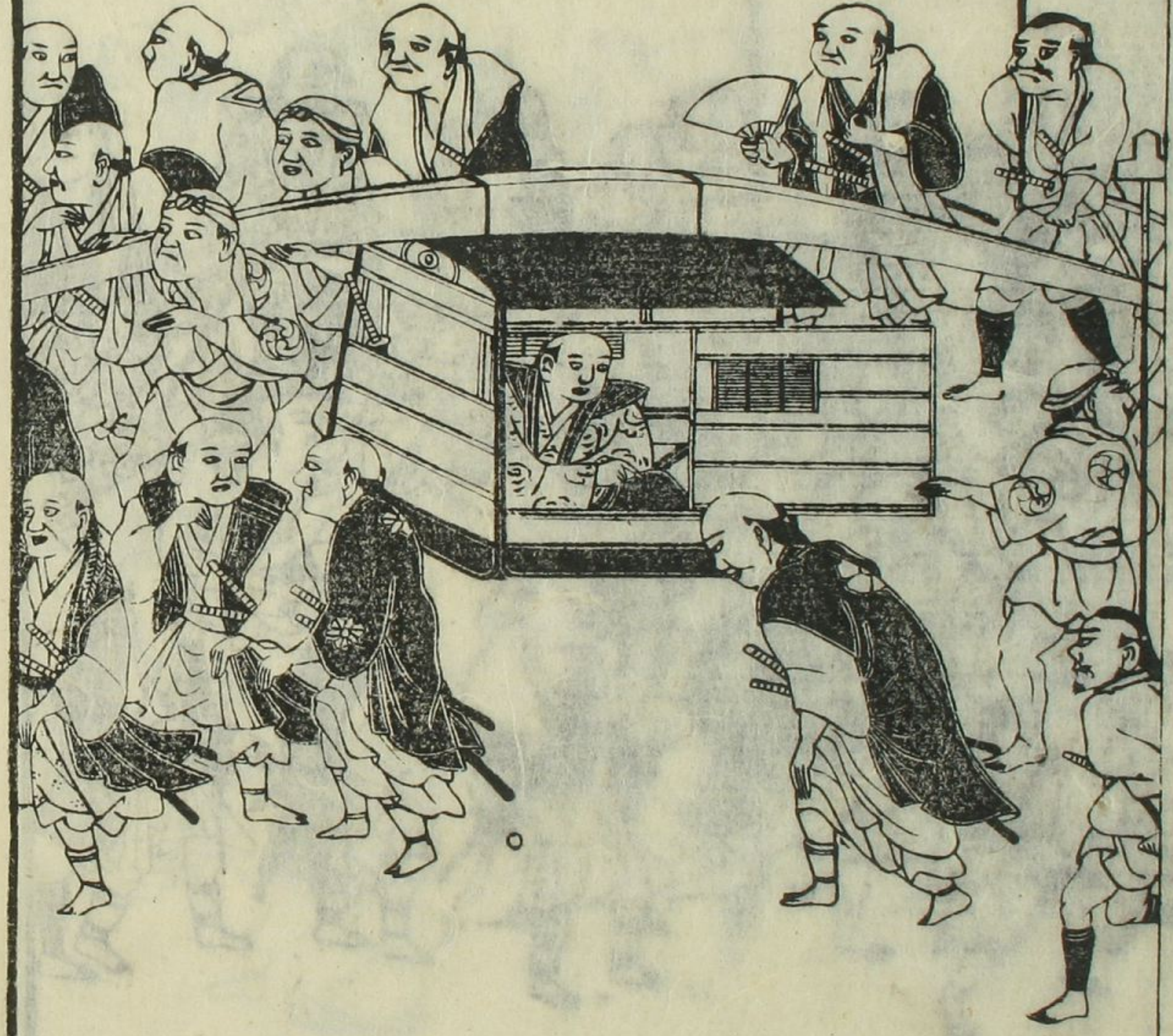
○去成をいふの供
と云ふは常と云
は是元禄の比と
云ふは元禄の比
車も多し作らひ
ら奴の思あり



○春成云々お侍々々
 けん物の中ふちよ刀
 招きなを備えり画あり
 ともてうん見安うん
 知らぬ熱くらんたを
 佩るるあはれいさるべ
 衣紋のまきしらすて
 羽のくくもゆもの
 ありべ



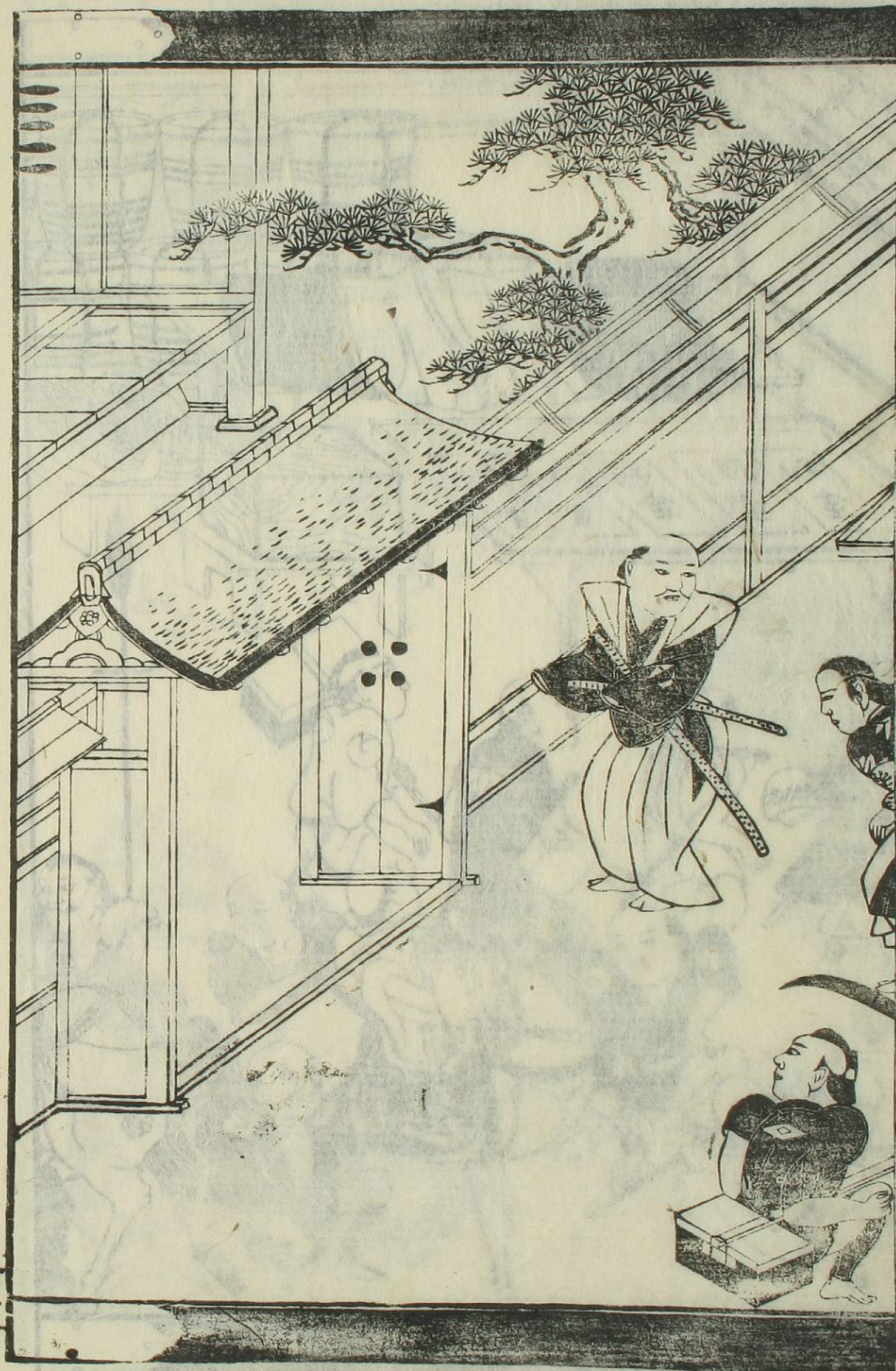
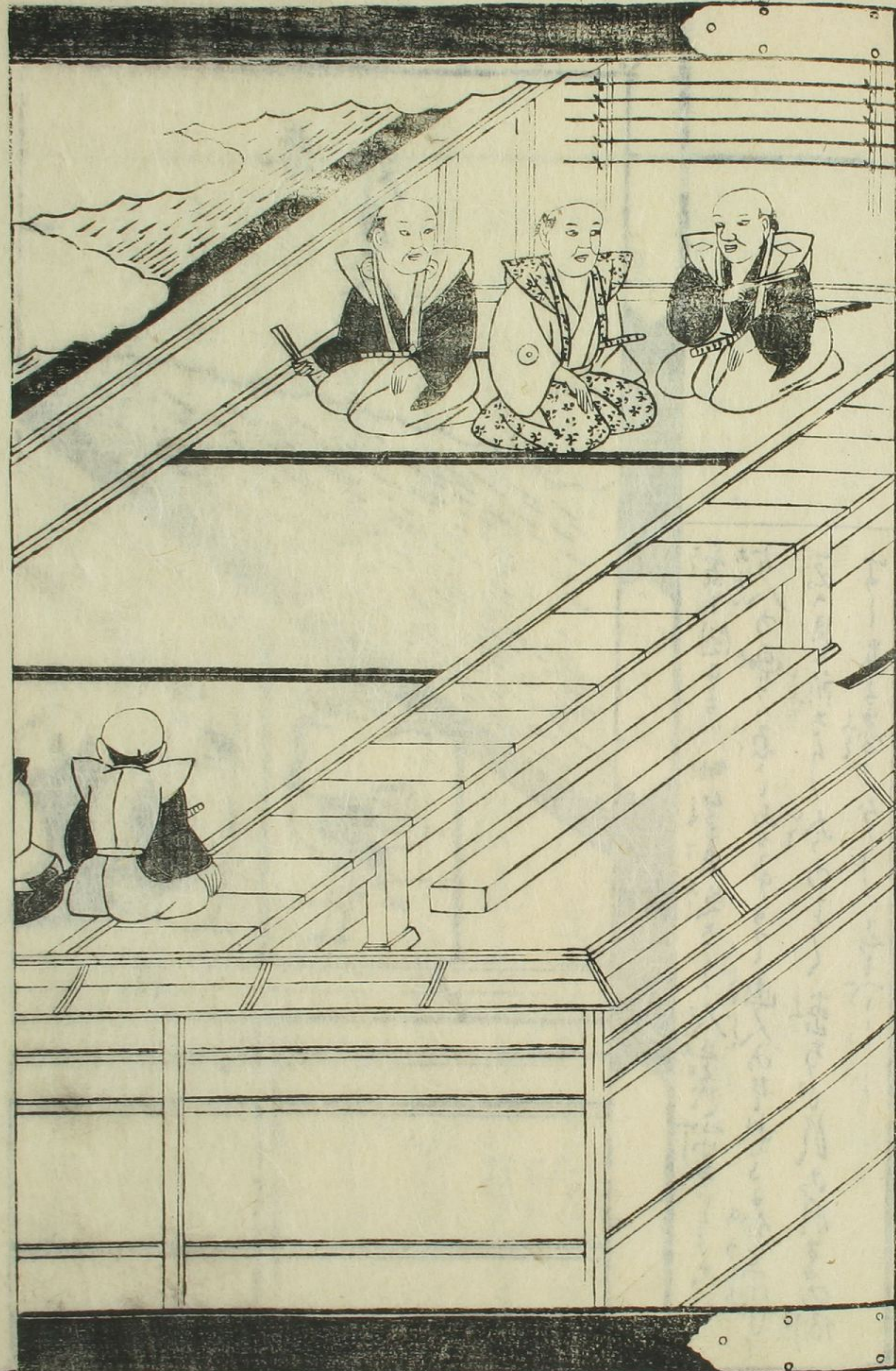
○春成云々お侍々々
 けん物の中ふちよ刀
 招きなを備えり画あり
 ともてうん見安うん
 知らぬ熱くらんたを
 佩るるあはれいさるべ
 衣紋のまきしらすて
 羽のくくもゆもの
 ありべ





挨拶の儀長之の付
 人々も古の作はま
 ておちのりなり

おもひつゝの
 一落し討候
 少て切取
 在後 文を云の時
 布経久内又



朱

卯月八日



友と國に人かき素足なり人せ成ふ家より出れり
百人の雪をへりありありて画人の筆のしるしを
まへに所なり今のとくおちりけりしるしの例
すしある事なり

○大名行列之圖

清水寺本堂外陣西の方西向掲ぐ

兼應四年 辻村茂兵衛画 夏に画中に泥江

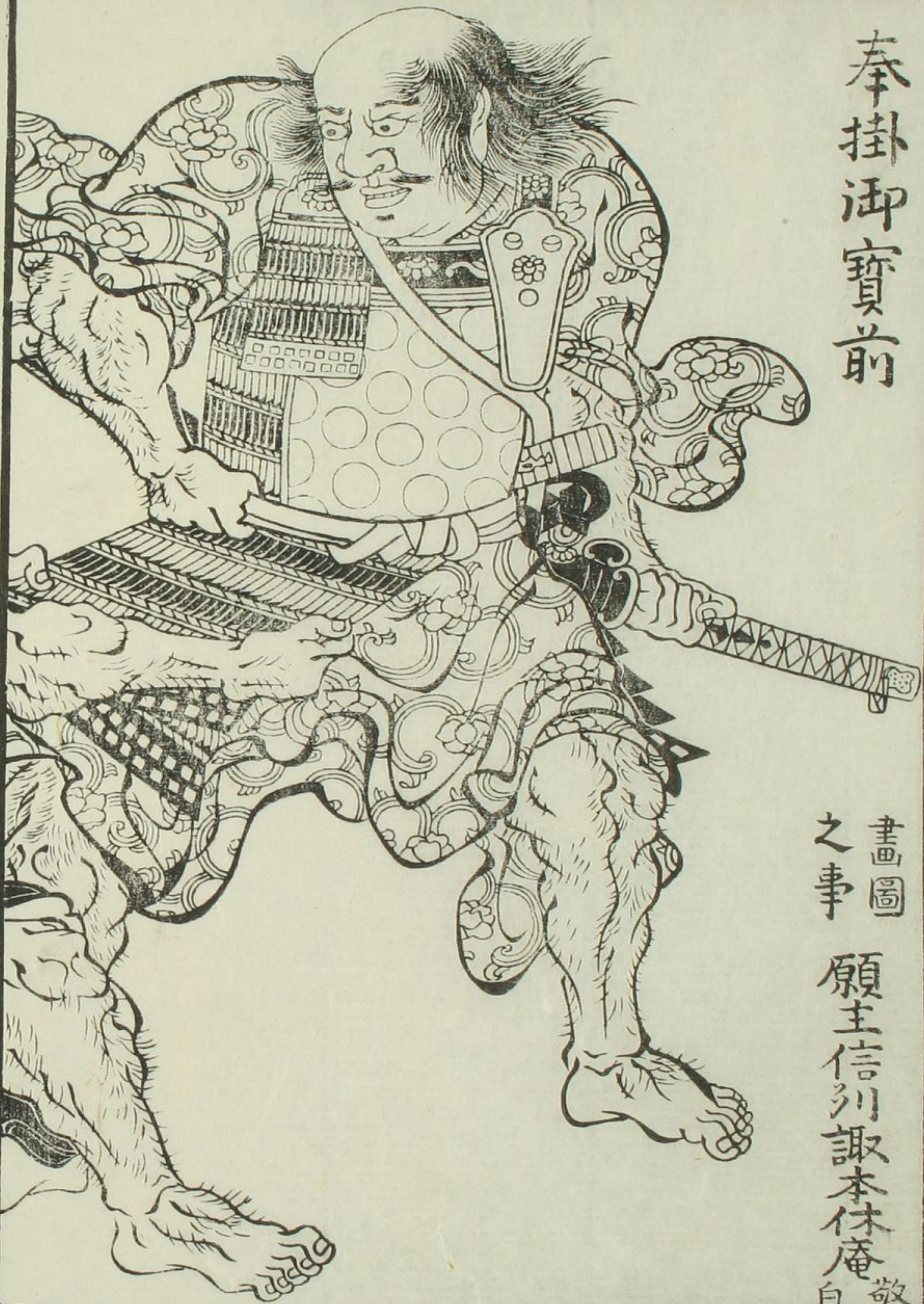
○朝比奈宗草摺曳之圖

清水寺本堂外陣掲ぐ

天正二十年 長谷川久義画

傳云、天正四年、和田たき盛、一、強引連下、控國に、んとて、大磯と
通り、黄瀬川乃、電鵝、手、越、の、少、將、大、磯、の、虎、と、て、街、道、一、法、遊、君、ありと
因、一、執、効、り、通、ん、と、遊、君、が、家、よ、入、り、長、斜、り、以、び、虎、も、若、り
ぬ、遊、君、と、十、餘、人、を、率、て、酒、を、飲、む、義、盛、次、始、先、給、は、宗、之、郎、義、三、の
武、治、も、は、本、所、義、仲、が、妻、也、本、所、義、三、の、古、郡、左、衛、門、氏、を、始、一、族
後、和、田、義、三、が、妻、也、和、田、義、三、の、古、郡、左、衛、門、氏、を、始、一、族
即、後、八、拾、餘、人、居、並、び、て、酒、宴、を、修、り、此、虎、と、す、遊、君、の、曾、孫、結、成、り
マ、め、れ、勢、り、以、結、び、今、日、も、結、成、の、事、あり、和、田、が、義、三、に、出、り、一、族
盛、々、志、虎、の、出、り、以、石、與、り、遊、君、以、止、り、出、り、一、族、十、郎、が、振、舞、り

奉掛御寶前



畫圖
之事

願主信列諏本休庵
白敬

朝比奈が致すの
付ね尻或一婦人
難やと久蔵生涯
とやと一 亥本文よ
生を少しのりみゆ
あつろと付べさ支
ふこそ久蔵の生涯
悔いも 藝道よんと
委する吉と付掛よ
こと

天正廿壬辰卯月十七日

長谷川久蔵筆



義秀が我浄の繪繪あり俗小と云ふ板繪の絶妙と云ふ傳云法就虎を
得と文禄元年壬辰把前の名護屋に於て秀吉之旅籠の山里に於座の
寫小彩飾の兒童を乞ふと云く西鶴織る云想じて繪馬を万人の目より
むかへて見おろす又本ものより都の清水小長谷川久松が筆や立所
船は余が力も船を畫し此繪のむかしは上小をぬく舞鶴の紋も
不独然の深ゆゆの下女が見出して活中を沙汰せり久松一生は
ワグムいふとありと云くせり此繪の既もけ畫のむかしは世小
名もつらりと云く

○鐘旭圖

祇園繪馬所掛

享保十三年自雪舟八代長谷川宇右衛門画

傳云唐玄宗帝夢に虚耗と云ふ鬼帝代侵し奉る時一人文鬼の
めと者来り虚耗を殺して柁をふ云宗彼女同く宣く海を何者

ぞ我を柁ふと又竹のぬきあり彼者淫で日長を徳南山の進士淫鬼と
先代我死す竹柁を以賜く之屋を昇る恩を報んて久末もや
告て先と夢覺す其像と異道子に画しを

釋教と落葉と云ふや一丈神の推す小鬼を打殺す画ありを
奇人けらる落葉と云ふり落葉と釋相昔日きり文人戯し
繪進士傳を作し云宗と異道子に画せり始り虚耗
とい負交神と云事りん故を夫以去り云り世人を同とる
やけけ

画人五月五日を画し朱と云ふ繪を画くも朱は繪のや
能く力有る所と云ふは用るに朱を朱と云ふは朱を朱と云ふ
縁り馬くふる朱を朱と云ふは朱を朱と云ふは朱を朱と云ふ
○朱の朱を朱と云ふは朱を朱と云ふは朱を朱と云ふは朱を朱と云ふ
朱の朱を朱と云ふは朱を朱と云ふは朱を朱と云ふは朱を朱と云ふ

都繪馬鑑二之卷終

